九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「中国少数民族の移動と共生」へのコメント

長谷，千代子
九州大学大学院比較社会文化研究院

https://doi.org/10.15017/2344799

出版情報：九州人類学会報. 42, pp.71-73, 2015-06-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

【レビュー・エッセイ】
2014年度九州人類学研究会オータムセミナー報告

セッションC「中国少数民族の移動と共生」へのコメント

長谷千代子（九州大学大学院比較社会文化研究院）

本セッションのキーワードである「共生」と「移動」は、どちらも使用しにくい概念である。まず、「共生」という概念は、きちんと定義して使わなければ、目に見える紛争状況にさえ陥っていなければなんでも「共生」していると呼べてしまうという危険性がある。とりわけ、「共生」という言葉から中国について連想されるのは、中国共産党が近年多用している「和諧社会」というスローガンであり、これは中国国内において漢族とその他の少数民族が協調的に生活する理想的社会状況を指している。しかし、この美名のもとに“先進的な”漢族が“後進的な”少数民族を指導することが正当化されたり、少数民族の側が一方的に漢族の文化を受容せざるをえなかったりするということがおこっている。こういう状況で安易に「共生」という概念を使用すれば、政治スローガンと大差ないことしか論じられなくなるおそれがある。発表のなかで、金縄（以下敬称略）は「非漢族の自覚を持った『モソ人』が、漢族文化の支配的な社会において、自らの伝統文化や民族意識を保ちつつ溶け込むことが共生の理想であり、そうした自覚が育たなかったり、あるいは薄らいだりして漢族社会に同化することは共生とは言えない」という立場であることは分かった。しかし、こうしたことは先行文献との関係を明らかにしながら最初に定義しておくべきである。他の発表者が「共生」について特に定義せずにこの語を使用している点も気になった。

次に「移動」というキーワードは、交通手段が高度に発展した近代特有の問題になりうるという視点から、近年社会科学系の論文において多用されている。中国についても「移動」に関する多くの論文が書かれているが、筆者の印象では、具体事例の蓄積に終始し、そこからより一般的に何が言えるのかという考察が手薄である。それぞれの具体事例は興味深い事実を報告しているとしても、それらを総括して得られるのは、

 ISSN 1881-7092

「漢族文化の影響が少数民族地域に浸透しつつある」とか、「開発しているところに人が集まり、お金が動く」とか、「出稼ぎ労働によって人々のライフスタイルが変わりつつある」とか、すでにほぼ自明の浅い結論ばかりなのである。以下、本セミナーのあり方と関連づけながら、筆者の気付く範囲で人の移動に関する研究の問題点を指摘してみたい。

まず、中国における少数民族の移動について考える場合、いわゆる「内地」からやってくるマジョリティである漢族系（いわゆる漢族だけでなく、漢化・漢族化した少数民族も含む）の人々の移動とセットで考察する必要がある。例外的なケースはあるかもしれないが、特に近代以降は、国民党軍、解放軍、下放、西部大開発、観光など、さまざまな理由で少数民族地域に流入する多数派の動向と無関係に少数派の移動が起こることは考えにくい。

次に、その民族が置かれている移動しやすさの条件を考慮する必要がある。たとえばモソ人が比較的孤立した地域に暮らしているのに対し、ウイグル族と朝鮮族は国境線沿いに住み、その向こうには同系統の民族が暮らしている。このようないわゆる「跨国民族」の場合、日本人が想像するよりも簡単に他国へ移住できる場合がある。時代や場所によって、強い動機がなくとも簡単に越境できたり、越境したいと願っても出来なかったりすることがあるので、注意が必要である。

中国に関する研究に限らず、「移動」の内訳を考えることも大事である。一言で「移動」についての研究と言っても、移動する人個人のライフ・ヒストリー、受け入れ社会の変化、送り出す側の社会の変化など、いくつかの着眼点がありうる。移動の目的も、使命感を持った開発、出稼ぎ、移住、留学、結婚、逃亡などさまざまである。しかし私見のかぎりでは、それらの違いをあまり考慮せずに「移動」という一言で安易にまとめて、一冊の論文集にしたり、パネル発表を行なったりするケースが多い。その場合、一つ一つの発表や論文は面白くても、その全体からはなんの議論もひき出せなくなってしまう。残念ながら本セッションもそれに近い。いくつかの変数を整理し、条件をある程度固定して、たとえば年代・地域・労働目的を限定したうえで、民族ごとの違いを論じるといったよう

に、何らかの議論が可能になるようなセッティングを考えるべきである。

今回のセッションについては、移動のジェンダー差、特に若い女性の移動に着目すると、あるいは有意義な議論ができたかもしれない。たとえば堀江（2014）は、雲南省のラフ族の女性がビジネスや観光で一時的に訪れた漢族と駆け落ちするケースが出てきて以来、村の婚姻習俗や夫婦関係にどのような変化が生じたかを詳細に描いている。今回のモソに関する金縄の発表はこのラフのケースと対比させることが可能であり、アイネル・バラティの報告のなかに出てきた、新疆高校クラスに通う女学生の状況や、朝鮮族女性の移動状況などが分かれば、少数民族の若い女性の移動を通して、移動者を送り出す側の共同体の現状についての議論ができたかもしれない。いずれにせよ、事前にもう少し企画を練る必要のあったセッションであった。

【参照文献】

堀江未央

2014　「中国雲南省ラフ族女性の遠隔地婚出：ラフ社会における結婚との関わりに着目して」『東南アジア研究』52（1）：52 - 81.

（2016 年 1 月 4 日原稿掲載承認）